



日语教学与日本文化研究

——2013年度上海外国语大学日本文化经济学院
国际研讨会纪念文集

主編／季林根

 華東理工大學出版社



日语教学与日本文化研究

——2013年度上海外国语大学日本文化经济学院 国际研讨会纪念文集

主编 / 季林根



华东理工大学出版社
· 上海 ·

图书在版编目(CIP)数据

日语教学与日本文化研究:2013 年度上海外国语大学日本文化经济学院国际研讨会纪念文集/季林根主编. —上海:华东理工大学出版社,2014.9

(博雅文库丛书)

ISBN 978-7-5628-4023-7

I. ①日… II. ①季… III. ①日语-教学研究-文集 ②文化史-日本-文集
IV. ①H369-53 ②K313.03-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 204118 号

博雅文库丛书

日语教学与日本文化研究

——2013 年度上海外国语大学日本文化经济学院国际研讨会纪念文集

主 编 / 季林根

责任编辑 / 嵇 蕾

责任校对 / 金慧娟

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地 址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64252001(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 上海市崇明县裕安印刷厂

开 本 / 787mm×1092mm 1/16

印 张 / 25.75

字 数 / 737 千字

版 次 / 2014 年 9 月第 1 版

印 次 / 2014 年 9 月第 1 次

书 号 / ISBN 978-7-5628-4023-7

定 价 / 128.00 元

联系我们: 电子邮箱 press_wy@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

淘 宝 网 <http://shop61951206.taobao.com>



前 言

上海外国语大学日语语言文学专业成立至今已有 55 年历史了,日语专业独立建系也已满 30 周年。经过几代人的努力,本专业目前已拥有 30 余名专职教师,专业方向齐全,集本科、硕士、博士研究生教学于一身,教学科研水平在国内高校中名列前茅。当然,随着国内各高校大量开设日语语言文学专业,从事日语教学和日本学研究的教师和科研人员数量均已达到前所未有的规模。量的扩大也促进了质的提高,我国的日本学研究已不局限于借鉴和模仿国外研究,逐渐开始探索具有中国特色的日本学研究模式。

上海外国语大学日语系在 1984 年成立了日本研究中心,今年正值中心成立 30 周年。30 年前,日本研究中心出版了上海外国语大学第一本日本研究论文集。但这本论文集中仅刊登了 10 多篇论文,不但论文数量少,而且内容也基本集中在语法、文学和文化等少数研究领域,论文缺乏广度和深度,若用今天的标准衡量,有部分论文甚至都谈不上研究。关于日语教学,仅有时任日语系主任和中国日语教学研究会会长的王宏教授撰写的一篇有关高校日语教学状况的论文。虽然如此,但我们仍然应该看到,正是因为当年迈出了第一步,才会有日语系及日本文化经济学院其后出版的十多本日本研究论文集。

本论文集共汇集了中日两国日本学研究者的 81 篇论文,其中日语教育研究 19 篇、日本文化研究 10 篇、日语语言研究 29 篇、日本文学研究 14 篇、日本经济社会研究 9 篇。与 30 年前相比,论文的数量和质量都不可同日而语。虽然说发展是必然的,但所有的发展都建立在各位日本学研究界同仁的不断努力之上。近年来,国内许多高校和科研机构都定期举办各类主题的日本学研究国际研讨会,通过这些平台,国内外学者交流学术成果,探讨日本学研究各领域的前沿课题,大大促进了本学科学术水平的提高。本论文集正是 2013 年 11 月在上海外国语大学举办的日语教育暨日本文化研究国际学术研讨会的成果之一。

众所周知,大学的功能被归结为教育、科研和社会服务等三个方面。本论文集所收录的论文是诸多日本学研究者的最新研究成果,相信这些成果能够为日语教学、日本研究以及其他社会各界人士提供有益的参考。此外,进入 21 世纪以后,我国的大学还被赋予了文化传承的新任务。作为从事日语教学和日本研究的一员,我们的任务是要把日本的文化介绍给国人,同时把我国的文化传播到海外。为完成上述任务,需要我们本着务实的精神,在科研与教学工作中不断开拓创新,笔者希望本论文集的出版能够成为一次有益的尝试。

此外,本论文集所收录论文按照作者姓名的拼音字母顺序排列,特此说明。

最后,谨以此书向即将迎来九十华诞的著名日语教育家王宏教授致敬。

编 者

2014 年 7 月

目 录

日语教育研究

ACTFL-OPIが中国の日本語に関する第二言語習得研究への応用	曹 娜(2)
中国人日本語学習者における未習漢字語の意味推測に関する一考察	陈梦夏(8)
学習者のニーズに即した内容重視型作文教育の試み	
——TAEを用いた自己PR文の作成を例として	东会娟(14)
中国における日本語教材の変遷からみる発展の流れ	伏 泉(19)
会話授業に対する学生の意識・態度について	富岡一十見(24)
日语专业四级考试试题效度分析与基础教学探索	李菁菁(28)
基础日语写作课程优化与教学内容改革的研究与实践	李运博(32)
自己添削を導入した作文授業から考える課題	林 工(36)
汉口口译教学中的语法教学	凌 蓉(41)
大学における日本語教育の目的・内容・方法	秦政春(46)
中国人大学生のためのビジネス日本語教材作成へ向けて	
——学習者の興味と不安から	上川多恵子(51)
面向日语专业的词典学教学研究与实践	邵艳红(55)
中級レベル学習者の自己評価にみる作文添削指導の可能性と課題	石津みなど(59)
中国語・英語・日本語学習者コーパスにみる空間認知と誤用	望月圭子(64)
教師主体から学習者主体へ	徐 曙(69)
中国特色的教学管理——基于上外第二课堂实践活动的经验	许慈惠(73)
中国人学習者のための複合動詞指導方法に関する一考察	
——「～上げる」を例に	杨晓敏(79)
日本語会話教授法に関する一考察	
——課外活動を通して	澤田依子(85)
日本語専攻学習者の学習情意変容に関する一考察	
——低学年を中心に	张丽梅(89)

日本文化研究

日本の漆文化の歴史およびその発達の原因への一考察	陈 灿(98)
日本人の姓氏の由来について	付明非(102)
文心与禅心	
——从文化视角论中日古典园林的差异	李晓宇(107)
「三輪山伝説」についての一考察	
——『古事記』を中心に	梁海燕(110)
从亲属称呼看中日文化差异	朴惠英(116)
圣德太子与中国大陆文化的吸收	王建民(119)

试论《文艺上的自然主义》	余祖发(123)
日本の家督制度について	张 昂(127)
西周の造語の近代性	
——「哲学」を中心に	张厚泉(131)
山が育んできた日本人の精神文化	中澤米子(138)

日语语言研究

定语从句中谓动词的时体形式与意义

——以内在情感动词为中心	蔡 妍(144)
从信息的观点浅析「～じゃない(か)」的用法与功能	陈 雪(148)
「起点+ヲ+移動自動詞」構文について	
——認知言語学からの一考察	谷 珍(152)
日本語感情慣用句の身体性	关 薇(157)
書きことばの確定条件について	
——「と」と「たら」を中心に	郭 楠(164)
「ヲ」格の機能についての一考察	金玺罡(170)
感觉形容词「あつい」について	李佳宝 张 兴(175)
形容词连用形的副词形式与动词共起时的语义指向	刘 曼(180)
《可能性》から見た「V-る+ことがある/ない」	吕雷宁(184)
V+V型複合動詞のペアになる後項動詞	皮细庚(189)
和语サ变动词的形成障碍	邱根成(194)
中国語と日本語における接尾辞「然」に関する対照的考察	任川海(199)
事象関連電位を用いたモーラ認知に関する考察	任 星(205)
規定語節の意味特徴及び主節との意味関係	沈书娟(210)
基于语种库的汉日语语序类型学研究	
——以主要语序参项为中心	盛文忠(215)
日语色彩词的象征意义	
——以“赤、白、黑、青”为例	孙盛因(220)
無標識可能表現	孙 颖(225)
モーダルな「ものだ」の共起について	王晓华(230)
授受表現日漢対比研究の新視点	
——連語論研究の成果を生かして	吴大纲(235)
关于表达“程度”义的副助词之考察	吴伟丽(241)
複合動詞における「～つける」の意味拡張の段階性について	夏植兰(246)
配慮表現の諸相及び発想	
——依頼表現、断り表現をめぐる考察	胥雯婷(251)
「上」的心理范畴结构初探	徐 莲(257)
[誘い]表現の決定権と利益について	杨 吟(261)
从认知角度浅析他动词的介在性用法	虞崖暖(266)
流行语与日本社会的变迁	赵 鸿(271)
中国語と日本語における次元形容詞〈厚・薄〉/「厚・薄」の多義性研究	
——放射状カテゴリーおよび概念メタファーの視点から	赵寅秋(275)

日本語の名＋名複合名詞の意味形成とその特性

- メタファーとメトニミーの観点から 周 星(282)
- 谈话中的日语主语省略研究 朱 惠(287)

日本文学研究

紫式部与《源氏物语》难以挣脱的“政治宿命”

- 兼谈日本文学的“超政治性倾向” 程慧敏(294)
- 日本文学作品における非言語表現の翻訳について 丁尚虎(298)
- 日本近代知识分子中国观的一个侧面：木下杢太郎《中国南北记》 高 洁(302)
- 论古井由吉小说中的叙事时间 高丽霞(307)
- 近年日本复兴中的儿童文学课题
- 以《日本儿童文学》杂志为中心 黄育红(311)
- 女性審美から見る現実と非現実との共存
- 『雪国』における「赤」「黒」「白」を中心に 江亦舟(315)
- 侵略戦争の共犯者
- 林芙美子の戦争協力をめぐって 李先瑞 施 莹(321)
- 浅论《日本灵异记》与汉籍
- 以冥界故事的比较为中心 潘 宁(326)
- 村上春树《寻羊历险记》与卡夫卡《变形记》 彭 芃(330)
- 夏目漱石文学教育的若干思考 孙 宁 窦硕华(335)
- 太宰文学へドストエフスキーの影響
- 『人間失格』を中心に 王彦春(339)
- 普遍的な「愛」：『深い河』論 杨爱丽(342)
- 浅析《我在美丽的日本》的“死亡之美” 姚胜旬(347)
- 从“他人就是地狱”解析芥川龙之介之《鼻子》 周 婷(352)

日本经济社会研究

- 日本の国費奨学金制度に関する一考察 代子安(358)
- 食品の信頼回復への流通課題
- マーケティング視点から 金 琦(364)
- 近代に日本系百貨店の大連進出 罗石巧(370)
- 日本“介护保险制度”的运行模式及其课题 马利中 吴 杰(375)
- 安倍政权经济政策批判 瞿晓华(379)
- 中日のシルバー産業に関する一考察 阮浩杰(384)
- 消費増税と地方財政 吴诗云(389)
- 景德鎮磁器の改革と発展について
- 日本からの啓発 吴 煜(393)
- 東証・大証統合が東京国際金融センター戦略に与える影響 张 建(397)

日语教育研究

ACTFL-OPIが中国の日本語に関する 第二言語習得研究への応用

上海外国語大学 曹 娜

1. 「ACTFL-OPI」とは

1.1 「ACTFL-OPI」とは

「ACTFL」というのは、全米外国語教育協会の略称で、外国語教育に携わっている人々約1万人が会員になっている学会である。「OPI」とは、「oral proficiency interview(オーラル・プロフィシエンシー・インタビュー)」の頭文字で、「口頭到達度インタビュー」のことである。従って、「ACTFL-OPI」は、アクトフルによって開発された汎言語的に外国語の口頭運用能力を測定できるテストのことである。「ACTFL-OPI」に関する厳密な定義については、牧野(2001)では、「OPIとは、外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテストである」と記載されている。現在、日本語の口頭運用能力を測定できるのは「ACTFL-OPI」のみである。

1.2 口頭運用能力の測定の仕方

OPIでは、テスト資格を取得したテストが被験者と1対1のインタビュー形式で、30分以内にいろいろな質問をしていく。そのインタビューは全て録音され、終了後にOPIを行ったテストが改めて聞き直し、ガイドラインに照らしながら、被験者の口頭運用能力がどのレベルにあるかを判定していく。

1.3 ACTFL-OPIのレベル判定

ACTFL-OPIの具体的なレベル判定を言うと、OPIでは、「超級、上級、中級、初級」という4つの主要レベルがある。上級、中級、初級はさらに細かく「上・中・下」の3つの下位レベルに分かれている。すなわち、「超級、上級-上、上級-中、上級-下、中級-上、中級-中、中級-下、初級-上、初級-中、初級-下」の10レベルに判定される。

1.4 インタビューの内容

インタビューは、レベルを判定するための決め手(証拠)となる発話サンプルを得るためにするものでテストを受ける人のレベルによっていろいろな話題に関する質問をして、言葉を使ってどのようなことが出来るかというレベル判定の材料となるサンプルを引き出していく。インタビュー中は、相手の発話を聞いてレベル判定をしながら、同時に質問も組み立てていく。従って、インタビューの質問は予め決まっていない。また、テストは自然会話に近い形で行わなければならない。なぜかと言うと、主たる運用能力のレベルを決定するのに必要な総合的タスクができるということを示すだけでなく、その目標言語を用いて機能できる能力があることを裏付けるような、自然な会話のやり取りが必要になるわけである。ただ、自由に話してもらっただけでは、単なるおしゃべりになってしまい、テストとしてのレベル判定の決め手となる発話サンプル

抽出することはできない。OPIは、外国語を話す能力の下限(被験者が一貫して維持できる言語運用能力の最高レベル)と上限(被験者が種々の異なる話題を通してこれ以上言語運用を維持できなくなってしまうレベル)を探り、判定できる発話サンプルを抽出し、レベル判定を行う。

1.5 インタビューの構成

その決め手となる有効なサンプルを得るために、次のような4つの手順を踏んでインタビューを進めていく。まず、テストを受ける人をリラックスさせる「導入部(Warm Up)」、それから、下限を見極めるための「レベルチェック(Level Check)」と上限を決める「突き上げ(Probes)」を交互にする部分、インタビュー全体の4分の3ぐらいでタスク能力を測るために行う「ロールプレイ(Role Play)」、そして、被験者が気持ちよくインタビューを終われるようにする最後の「終結部(Wind Down)」である。各部分でする質問は、それぞれのレベルで要求される口頭運用能力の証拠となるサンプルが出てくるようなものをテスターが選んでしていく。具体的なものは下の表1のとおりである。

表1 OPIの構成

	導入部	反復過程 レベルチェック ←→ 突き上げ		終結部
心理面	被験者を落ち着かせる	被験者に何ができるかを示す	被験者に何ができないかを示す	一番正確に機能できるレベルに戻し、被験者に達成感を与える
言語面	被験者に目標言語に慣れさせ、目標言語へ移行させる。この時、試験官は被験者の興味・経験についてのデータベースを構築する	被験者が十分、楽にかつ正確に、流暢にこなせる言語機能と内容の領域を特定する	被験者が言語的挫折を起こす言語的機能と内容の領域を特定する	被験者のできる機能が明らかになり、インタビューが終了することを被験者にわからせる
評価面	被験者が言語能力のどのレベルであるか最初の見当をつける	被験者が維持できる最高のレベルを見つける(下限の決定)	運用能力がこれ以上、維持できないというレベルを見つける(上限の決定)	

1.6 レベル判定の基準

レベル判定は、ACTFLが作ったガイドライン(『ACTFL 言語運用能力基準—話技能』[1999年改訂版])という基準に沿って、全体的・総合的に判断する。その判定基準は牧野(2001)では以下の表2、表3、表4のとおりにまとめている。

表2 判定の基準

	機能・タスク	場面/話題	テキストの型
超級 (Superior)	裏付けのある意見が述べられる。仮説が立てられる。言語的に不馴れな状況に対応できる	フォーマル/インフォーマルな状況で、抽象的な話題、専門的な話題を幅広くこなせる	複段落
上級 (Advanced)	詳しい説明・叙述ができる。予期していなかった複雑な状況に対応できる	インフォーマルな状況で具体的な話題がこなせる。フォーマルな状況で話せることもある	段落

(续表)

	機能・タスク	場面/話題	テキストの型
中級 (Intermediate)	意味のある陳述・質問内容を、模倣ではなく創造できる。サバイバルのタスクを遂行できるが、会話の主導権を取ることはできない	日常的な場面で身近な日常的な話題が話せる	文
初級 (Novice)	機能的な能力がない。暗記した語句を使って、最低の伝達などの極めて限られた内容が話せる	非常に身近な場面において挨拶を行う	句

表3 正確さ(1)

	文法	語彙	テキストの型
超級 (Superior)	基本構文に間違いがまずない。低頻度構文には間違いがあるが伝達に支障は起きない	語彙が豊富。特に漢語系の抽象語彙が駆使できる	だれが聞いてもわかる。母語の痕跡がほとんどない
上級 (Advanced)	談話文法を使って統括された段落が作れる	漢語系の抽象語彙の部分的コントロールができる	外国人の日本語に慣れていない人にもわかるが、母語の影響が残っている
中級 (Intermediate)	高頻度構文がかなりコントロールされている	具体的で身近な基礎語彙が使える	外国人の日本語に慣れている人にはわかる
初級 (Novice)	語・句のレベルだから文法は事実上ないに等しい	わずかの丸暗記した基礎語彙や挨拶言葉が使える	母語の影響が強く、外国人の日本語に慣れている人にもわかりにくい

表4 正確さ(2)

	社会言語学的能力	語用論的能力 (ストラテジー)	流暢さ
超級 (Superior)	くだけた表現もかしこまった敬語もできる	ターンテイキング、重要な情報のハイライトの仕方、間のとり方、相づちなどが巧みにできる	会話全体がなめらか
上級 (Advanced)	主なスピーチレベルが使える。敬語は部分的コントロールだけ	相づち、言い換えができる	ときどきつかえることはあるが、一人でどんどん話せる
中級 (Intermediate)	常体か敬体のどちらかが駆使できる	相づち、言い換えなどに成功するのはまれ	使えることが多いし、一人で話し続けることは難しい
初級 (Novice)	暗記した待遇表現だけができる	語用論的能力はゼロ	流暢さはない

2. ACTFL-OPIが日本における第二言語習得への応用

ACTFL-OPIは、1990年3月 ACTFL(全米外国語教育協会)が株式会社アルクの協力を得てワークショップを開催することにより、初めて日本に紹介された。東京で行われた第1回ワークショップには、牧野成一教授とキヨ・ヤマダ・スチーブソン先生がトレーナーとして招かれ、日本各地から25名が参加していたという。ACTFL-OPIが日本に紹介され、20年以上の歳月が経ったが、現在、ACTFL-OPIは日本語口頭運用能力テストの開発のほか、第二言語習得に関する研究など、様々な領域に応用されている。

第二言語習得への応用成果は主に、横断的研究と縦断的研究の二種類に分けられている。まず、横断的研究はACTFL-OPIが第二言語習得において最も応用されている分野である。即ち、初級、中級、上級、超級の四レベル学習者群のOPIインタビュー録音を文字化し、その文字化したものを比較・分析することによって、ある文法項目、形態素などが話し言葉における習得過程、及びそのその習得過程を与えたと考えられる要因などを推測することができる。例えば、『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』に収録されている河野(1999)、小林(1999)、齋藤(1999)、迫田(1999)、佐藤(1999)、渋谷(1999)、田中(1999a)、田中(1999b)、戸田・カッケンブッシュ(1999)、山内(1999)などの論文は皆 ACTFL-OPIを利用して、横断的研究を行った第二言語習得研究である。そのほかに、許(2000)、ニンジャローンスック(2001)、大関(2005)等が挙げられる。

次に、縦断的研究はほかの話し言葉に応用できる研究資料の収集方法が匹敵できない、ACTFL-OPIしかできない研究方法である。即ち、ACTFL-OPIを利用して、ある一定の被験者群に長期に渡ってインタビューを行い、その被験者群の話し言葉における習得過程を観察することである。代表的な研究は齋藤(1994)、荻原(1996)、金庭・奥野・山森(2011)、山森・金庭・奥野(2012)等挙げられる。

3. ACTFL-OPIが中国における日本語の第二言語習得研究への応用展望

1990年 ACTFL-OPIが日本に導入されてから、日本語口頭運用能力テストの開発のほか、第二言語習得に関する研究においても広く応用されている。そして、ACTFL-OPIのテスターが年々増えている中、韓国や香港においても「ACTFL-OPI 試験官養成ワークショップ」はすでに数回行われていて、韓国人をはじめとする日本語を母語としないテスターも続々誕生している。そして、近年中国においても、ACTFL-OPIは英語教育、中国語教育にも応用されるようになり、それらに関する研究や論文が増える一方、日本語教育においてはACTFL-OPIに関する論文はわずかであり、「ACTFL-OPI 試験官」というテスターの資格を取得している中国人はわずか著者一人である。「ACTFL-OPI」は中国の日本語教育界ではまだ空白の状態だと言えるであろう。従って、ACTFL-OPIが日本において幅広く応用されているように、口頭運用能力を測定する試験の開発のほか、第二言語習得に関する研究など、中国の日本語教育における応用も期待できるんじゃないかと思われる。

ACTFL-OPIが中国における日本語話し言葉の第二言語習得の新領域が開拓できると思われる。まず、今までの中国国内における日本語の第二言語習得では、中国語を母語とする学習者(以下「中国人学習者」とする)が産出した書き言葉の文法項目や形態素に関する研究は多く見られるが、中国人学習者が産出した話し言葉の文法項目や形態素に関する研究はあまり見当たらないようである。日本語は書き言葉と話し言葉がだいぶ離れていると言われることが多いため、日本語の書き言葉における習得状況を一概に「日本語の習得」とは言いがたい。従って、日本語を書き言葉と話し言葉に分け、それぞれについて第二言語習得研究を行う必要があるのではないかと

思われる。今まで、日本語学習者における話し言葉の習得研究がなかなか見られないのは、いかに学習者の適切な発話材料を収集するのは難しく、そして、収集した発話資料をどう評価するのもはっきりした基準が整えていないことに原因があると考えられる。この二つの要因で中国における日本語の話し言葉に関する第二言語習得研究が大いに阻害されていると思われる。しかし、ACTFL-OPIというテストの手法と判定基準を中国に導入することによって、今まで話し言葉における習得研究が直面している難問がすべて解決されるであろう。

次に、「2. ACTFL-OPIが日本における第二言語習得への応用」のところでも触れたが、ある一定の被験者群に長期に渡ってOPIインタビューを行い、その被験者群の話し言葉における習得過程を観察する縦断研究はほかの話し言葉に応用できる研究資料の収集方法が匹敵できない、ACTFL-OPIしかできないことである。即ち、ACTFL-OPIは話し言葉の縦断研究においては最も優れているところである。従って、ACTFL-OPIを中国に導入することによって、日本語の話し言葉の縦断研究は量的にも質的にも飛躍することが期待できよう。

4. おわりに

以上のことを踏まえ、いち早くACTFL-OPIを中国における日本語教育界に導入し、中国の日本語教育における第二言語習得研究へ応用する必要があるのではないと思われる。

参考文献

- [1] 大関浩美. 2004. 日本語学習者の連体修飾構造習得過程: 修飾節の状態性の観点から[J]. 日本語教育(121):36-45.
- [2] 荻原稚佳子. 1996. 日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー使用の縦断的研究[J]. 講座日本語教育第31分冊. 早稲田大学日本語研究教育センター:74-92.
- [3] 金庭久美子, 奥野由紀子, 山森理恵. 2011. 日韓共同理工系学部留学生の縦断的な発話分析—終助詞を含む表現に注目して—[J]. 横浜国立大学留学生センター教育研究論集(18):3-32.
- [4] 河野俊之. 1999. 動詞のアクセントの習得[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [5] 許夏珮. 2000. 自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究—OPIデータの分析結果から—[J]. 日本語教育(104):20-29.
- [6] 小林ミナ. 1999. KYコーパスにあらわれた疑問詞疑問—インタビューパートにおける学習者からの質問に注目して—[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [7] 齋藤眞理子. 1994. 留学生インタビューに現れた談話の縦断的研究—談話の型の習得に関する考察—[J]. 文化女子大学紀要人文・社会科学研究(2):69-84.
- [8] 齋藤眞理子. 1999. ACTFL-OPI 初級から超級に見られた相槌の分析[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [9] 迫田久美子. 1999. 第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [10] 佐藤豊. 1999. 日本語の中間言語における空項とレベルの関係[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [11] 渋谷克巳. 1999. フォーマルスタイルとインフォーマルスタイルのあいだ—中間言語のスタイルの一側面—[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [12] スニーラット・ニンジャローンスック. 2001. OPIデータにおける「条件表現」の習得研究—中国語、韓国語、英語母語話者の自然発話から—[J]. 日本語教育(111):26-35.

- [13] 田中真理. 1999. OPIにおける日本語のヴォイスの習得状況—英語・韓国語・中国語話者の場合—[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [14] 田中真理. 1999. OPIに現れた受身表現について—日本語教育とコミュニケーションの視点から—[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [15] 戸田貴子, カッケンブッシュ寛子. 1999. 中間言語における外来語アクセントの形成と日本人話者による評価[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [16] 牧野成一監修. 1999. ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル(1999年改訂版)[S]. 東京: アルク.
- [17] 牧野成一, 鎌田修, 山内博之, 等. 2001. ACTFL-OPI 入門[M]. 東京: アルク.
- [18] 山内博之. 1999. 初級及び中級レベルにおける「文」の習得について[A]. カッケンブッシュ寛子研究代表. 第二言語としての日本語の習得に関する総合研究[C]. 平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- [19] 山森理恵, 金庭久美子, 奥野由紀子. 2012. 中級停滞者の縦断的発話の分析—動詞語彙・単文・複文に着目して—[J]. 横浜国立大学留学生センター教育研究論集(20): 115-136.

中国人日本語学習者における未習漢字語の意味推測に関する一考察

横浜国立大学大学院 陳夢夏

1. 背景と本研究の目的

従来の漢字教育研究の中では、漢字圏に属する中国の学習者は中国語の知識に頼り推測することができる点で、非漢字圏の学習者に比べて、有利であると同時に、多くの問題も抱えているということが知られている。文脈を通した学習が有効な方法の一つであるという認識が、学習者、教師、研究者の間で共通している。しかし、適切な文脈を通して、効果的に漢字語を学習する方法を示した研究は、あまり見あたらない。したがって、有効な学習方法を示すためには、中国人学習者がどのように文脈を使って漢字語を学習しているのかを明らかにする必要があると考える。まずは、中国語母語話者の日本語学習者による読解場面における漢字語の意味理解についての研究から始めたい。

漢字語に焦点をあてた意味推測研究は非漢字圏出身者を対象としたものが多い。漢字圏に属する中国人学習者を対象とした研究には、母語の転移と漢字語のカテゴリーに焦点をあて推測難度を検証したもの[陳(2003)、加藤(2005)、李(2006)、玉岡(2009)]が多いが、推測手がかりに関する研究は少ないと思われる。

崔(2003)は漢字と文脈、2種類だけの手がかりを前提として選択肢式質問紙調査を行った。しかし、Huckin & Bloch(1993)によると、中国語を母語とする英語学習者は未習英語を推測する際、文脈、形態素のほか、テキストに関するスキーマや百科事典的知識も利用していることが分かっている。したがって、中国語を母語とする日本語学習者は未習漢字語を推測する際に、漢字と文脈以外の手がかりも利用する可能性が高いと考える。さらに、選択肢式で調査すると、推測するとき学習者の内心で何がおこっているのかは、明らかにならない。

そこで、本研究では、具体的な手がかりの項目を中心に、学習環境との相関を分析したうえで、中国大陆の学習者による漢字語の意味推測の実態を明らかにすることを目的とした。

2. 質問

本研究のために設定した質問は以下のとおりである。

- 質問1 中国人日本語学習者が、未習漢字語を推測する際に、使った手がかりはどのようなものか。
- 質問2 中国人日本語学習者が、未習漢字語を推測する際に、推測のパターンにはどんな種類があるのか。
- 質問3 日本語に接触する頻度の異なる二つのグループ(JFL、JSL)の間では、推測の手がかりとパターンに違いがあるのか。

3. 本研究

3.1 調査対象者 JSL 環境の中国人日本語学習者15名
JFL 環境の中国人日本語学習者15名

3.2 意味推測テストと対象語

文化庁(1978)、三浦(1984)、陳(2009)の枠組みに基づき、日中漢字語の対象辞典や先行研究の語彙リストから、Same(意味が同じか、またはきわめて近い)、OverlapⅡ(日本語の方が意味範囲が広い)、OverlapⅢ(日本語には中国語にない意味があって、中国語には日本語にない意味がある)、Different(意味が著しく異なるもの)、Nothing①(漢字からの意味推測可能)、Nothing②(漢字からの意味推測不可能)という6タイプで各3個、計18個の漢字語を選別した。

調査に利用した文は、選別した漢字語が一度だけ現れる18文であり、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「書籍・文学」と「新聞」の二つのジャンルから取り出した。文脈の長さとの相関を検証するため、問題文を一行程度(39語程度)、三行程度(103語程度)、五行程度(180語程度)の三段階6文ずつで作成した。

3.3 調査方法

学習者の思考過程を語ってもらうことによって捉えるため、内省的データ収集方法の一つである発話思考法(Think aloud method)を採用した。

3.4 手順

まず、対象者の不安と緊張感を解消するため、自己紹介や雑談などの会話をする。つぎに、調査方法と目的を説明し、数学と意味推測の問題で練習させ、回答方法に慣れてから本調査を開始した。調査は主に中国語で行い、制限時間はとくに設定せず、十分に時間を与えた。また、11問終了時に休憩を入れた。調査は一人約30分で、中国語で協力者の了解を得て、録音と録画で併録した。調査を行った後、調査過程についてのインタビューを実施した。

3.5 分析方法

録音した音声データを書き起こし、分析の基礎的な資料とした。インタビューした内容は、文字化したデータを分析する際の参考とした。

4. 結果と考察

4.1 使用された手がかり

表1 使用した手がかりの内容

具体的な手がかりの項目(【】内は本研究における呼称である。)	
①語彙知識 【語】	A 中国語での漢字語に関する知識(「言外」: 中国語の「言外之意」)
	B 漢字語を構成する形態素そのものに関する知識 (「稼」→稼ぐ、「働」→働く)

(续表)

②文脈情報 【文】	A 全体的な文の意味
	B 部分的な文の意味
	C 文が提示した情報(『』から作品名であると判断した)
③文法知識【法】：品詞、助詞などの文法知識を利用して推測する	
④百科事典的知識【百】：提示した漢字語や文脈から想起される知識の総体	
⑤記憶【記】：被調査者は自分の記憶だけに頼って推測する	

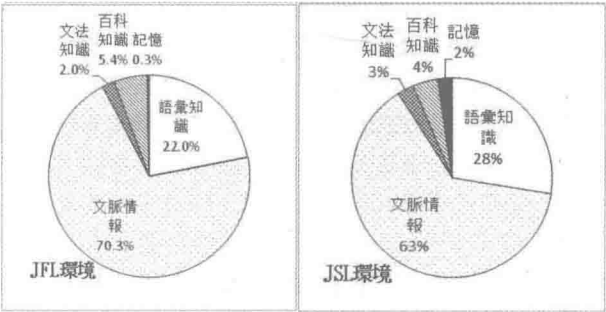


図1 使用された手がかりの利用率

学習環境と関係なく、中国人学習者が未習漢字語を推測する際に、①「語彙知識」、②「文脈情報」、③「文法知識」、④「百科事典的知識」、⑤「記憶」という五つの手がかりを使っていることを確認した。

利用率の結果から、学習環境に関係なく、文脈情報が一番多く使われ、その次に、語彙知識が多く使われることが分かった。そして、JSL 環境には、記憶という手がかりの利用率が2%もあって、結構な割合を占めている。これは半年以上自然な日本語に接触してきたJSL 学習者が、自分の日本語能力に自信を持っているためだと考える。

4.2 使用可能なパターン

中国人学習者が未知漢字語と遭遇した際に、使用可能なパターンとして、以下の12種類を抽出することができた。学習したことがあると確実に言った場合は【無】とする。

表2 JFL・JSL 環境の中国人学習者による使用可能なパターン別の出現数と正答率

使用可能な パターン	JFL			JSL		
	出現数	正答数	正答率	出現数	正答数	正答率
文	168/270	84	50%	155/270	110	71%
語＋文	56/270	41	73%	42/270	33	79%
語	16/270	14	88%	41/270	18	44%
文＋百	15/270	10	67%	9/270	7	79%
語＋文＋法	3/270	3	100%	7/270	7	100%
文＋法	3/270	1	33%	1/270	1	100%